

## 露日関係史料としてのI・F・リハチョフの中国海域艦隊の文書

ウラジミル・S・ソボレフ

一八五九年秋、英仏両政府は既に先鋭化していた中国との間の軋轢を背景に中国に対する戦争準備に着手する。この地域に生じた複雑な状況がツァーリ政府の不安を呼び起こさざるを得なかったのである。皇帝アレクサンドル二世により、ロシア極東国境地帯へのロシアの軍備配備を強化するという決定がなされた。

これを受けて一八五九年十一月十五日、東シベリア総督N・ムラヴィヨフ伯爵は、沿海州軍務知事兼シベリア艦隊および東海【日本海のこと】諸港司令官である海軍少将P・カザケヴィチに対して配備強化の指令を出した。この文書の中ではとりわけ次のことが述べられている。「中国との新しい戦争に向け英仏両国が行っている大規模の準備は、貴下に委任されている艦隊の全艦船を直ちに出勤態勢に置くことを我々にも必要とさせている<sup>(1)</sup>」。

シベリア艦隊(後のロシア太平洋艦隊の原型)はこの時期にはまだ少数で、本格的な戦闘力は備えていなかった。艦隊を編成していたのは全部で、コルベツト艦三隻、クリツパー艦二隻、スクリュー式輸送艦二隻のみであった<sup>(2)</sup>。そこでロシア政府は、バルト海から戦艦の一部を極東に派遣することを決定した。一八五九年末からバルチック艦隊の戦艦の遠洋航海への準備が始まった。艦船は準備状況に応じて二つの部隊に分かれて遠征に向かった。一八六〇年の初めに、コルベツト艦「ヴォエヴォ

ダ」、「ボヤリン」、クリツパー艦「チギト」などから成る第一部隊がI・クズネツォフ大佐指揮の下に出航した<sup>(3)</sup>。それよりやや遅れて、コルベツト艦「ルインダ」、「グリジェニ」、クリツパー艦「オブリチニク」などから成る第二部隊がA・ポポフ大佐指揮の下にクロンシタットを後にした<sup>(4)</sup>。

バルト海から派遣された艦船はすべて在北京ロシア公使E・プチャーチン伯爵の配下に入ることになっていたが、一八六〇年初めにプチャーチンの後任に皇帝侍従武官N・イグナチエフ陸軍少将が着任した。アムール河沿岸方面に向かっていた両戦艦部隊の司令官に対して特別訓令が海軍省で作成され、海軍元帥コンスタンチン・ニコラエヴィチ大公および海軍省長官N・クラツベ大將が署名をし、下付された。

訓令では、全艦隊の集結地は日本の三つの港、箱館、長崎、下田のいずれかにすることと定められていた。その際海軍省上層部は「集結地としてはアムール地方に最も近い箱館を選ぶのが他より好都合であろう」と考えていた<sup>(5)</sup>。ロシア艦隊の集結地として日本の港の一つを選択したという事実そのものが、下田と親条約調印後この時期までにすでに両国間に友好関係が形成されていたことを物語っている。

訓令によれば、艦船の司令官は長期にわたる移動の間は「専ら帆を使用し、蒸気の使用は、危険場所の通過のためという明らかに有益である

場合のみに限る」とされた。<sup>(6)</sup>海軍軍人に対するこの要請は、艦船に取り付けられた蒸気機関がまだ完全とは言えないもので、稼働寿命が限られていたことによるものであった。

訓令の作成者たちは、国庫金の節約規律の遵守、特に一般水兵に対する給付品の質に関する場合のロシア軍に伝統的な心得を記すことも忘れなかった。例えば、「軽くて廉価な葡萄酒が市場で探せない場合は、高価なものを購入せず、ラム酒に代えること。その際、ラム酒は葡萄酒の場合の半分の量を下付し、水と混ぜること」と規定されていた。<sup>(7)</sup>

中国海域連合艦隊司令官にはI・リハチヨフ大佐が任命された。一八六〇年一月十七日コンスタンチン・ニコラエヴィチ大公およびN・クラツベにより署名された正式な訓令書簡がI・リハチヨフに送付された。ここでは、「ペチエリースキー湾【渤海湾】に集結し我が国の在北京公使N・イグナチエフ陸軍少将の配下に入ることになっている艦隊の指揮を貴下に委ねる」との指示が出されている。<sup>(8)</sup>（図版1）。

I・リハチヨフには「本訓令からは予測できず緊急の決断を要するような場合には、なんら遠慮することなく、貴下は最良と認める行動を躊躇せず選択すること」との最大限の全権が与えられていた。<sup>(9)</sup>

更に訓令の中には、「事態が許せば近隣諸国を訪問すること。それらの国々の状況についての明確な概念は我々にとって政治的および海事的な面から重要なものである」という条項が含まれていた。<sup>(10)</sup>その後訓令の当該条項は日本調査に関して明確に実行された。

中国海域艦隊の旗艦で六〇門装備のスクリュー式フレガート艦「スヴェトラーナ」が地中海から到着した。艦はそれまではギリシャ沿岸を拠点としていた。<sup>(11)</sup>（図版2）

沿海州軍務知事P・カザケヴィチ海軍少将は一八六〇年五月二十八日付の書簡の中で、艦隊に必要な食糧および蒸気機関用のサハリン石炭を

供給する準備が整ったことをI・リハチヨフに報告した<sup>(11)</sup>（図版3）。

I・リハチヨフの艦隊の主力戦艦は次の八隻であった。フレガート艦「スヴェトラーナ」、コルベット艦「ボヤリン」、「ヴォエヴォダ」、「ボサドニク」、クリッパー艦「ヂギト」、「ナエズドニク」、「オプリチニク」、「ラズボイニク」である。

一八六〇年から一八六一年にかけて、艦隊の編成は数回変更された。つまり、長期間「戦闘当直体制」にあった艦の交替が行われ、替わりに別の艦船が派遣された。例えば、一八六〇年十月コルベット艦「カレワラ」とクリッパー艦「アブレク」が太平洋に向けてクロンシタットを出航、英国で、ロシア政府の注文で建造されたばかりのクリッパー艦「ガイダマク」およびスクリュー艦「モルジ」が合流した。これらの艦船はバルト海に帰還したコルベット艦「グリジェニ」、クリッパー艦「オプリチニク」、「ストレロク」の交替艦として来たものである。<sup>(12)</sup>一八六一年クロンシタットから極東に向けてコルベット艦「ルインダ」、「ノヴィク」、クリッパー艦「フサドニク」が出航したが、これらはコルベット艦「ボヤリン」、「ヴォエヴォダ」、クリッパー艦「ヂギト」の交替として戦闘部署に就いた。<sup>(13)</sup>

このようにして、極東地域での軍事・政治状況が先鋭化していた複雑な時期における極東でのロシア軍の十分に効果的な配備が保証された。

強調しておかなければならないのは、ロシアの軍艦は沿海州および中国沿岸で「警戒任務」、つまり当直に就いていただけで、実際の戦闘には一切参加しなかったことである。この点に関して興味深いのは、一八六〇年五月二十一日付で全艦隊に向けて出されたI・リハチヨフの命令である。その中では、「我が国の政府は中国とも、欧州列強とも、完全に中立的かつ平和的關係にある」と記され、これに関連して、全艦の艦長に対し「中国側とは小競合いや誤解の種となるようなことは避けること、

特に英仏が軍事行動を起こした際にはなおさらそうであらねばならぬ。」という指令が出された。<sup>14)</sup>

周知のように、英仏と中国の間で行われた軍事行動は、一八六〇年十月十三日、北京において三者間で講和条約が署名されたことで終結した。これを受けて在北京ロシア公使 N・イグナチエフは一八六〇年十一月一日付で中国海域艦隊司令部宛に指令を出した。その中では特に次のように述べられている。「我が国の艦船がペチエリースキー湾【渤海湾】にこれ以上駐留することは不適當であろうと判断し、私は、停泊中の全ロシア艦船に対して直ちに航路越冬のため任地に向かうことを御命令下さるよう、謹んで貴殿方にお願ひする」。<sup>15)</sup> N・イグナチエフ自身も一八六〇年十一月十日北京を出発しロシアに向かった。

これを受けてロシア艦船は中国の港を後にした。ただし、その年いっぱい、すなわち一八六一年十二月までは、I・リハチョフの艦隊の艦船は沿海州と日本の沿岸付近の航海を続け、各地の港町に停泊した。

すでに指摘したように、ロシア政府は、日本政府との合意に従って、日本の三つの港をI・リハチョフの艦隊の拠点地として使用することを予定した。一八六〇年から一八六一年にかけて、ロシア軍艦は何回となく日本の港に寄港し、そこで長期の停泊をし、艦隊司令部は現地当局の代表者と実務的接触を持った。

これらすべての活動の結果として、ロシア国立海軍文書館に保存されている文書フォンド「ロシア・中国海域艦隊」の中に露日交流に関する興味深い文書が残されている。

このフォンドの文書を丹念に調査した結果、我々は当該テーマに関する文書群の特定とそれらの学術的体系化および史料学的分析に成功した。

この文書群は、我々の観点から見て、四つの基本的なグループに分けることができる。

- 一、日本の港―ロシア艦船の拠点
  - 二、艦隊司令部と日本当局との関係の発展
  - 三、住民との交流
  - 四、日本沿岸付近の水路測量調査
- 以下これらの史料グループの構成と内容についてより詳しく見ていくことにする。

#### 一、日本の港―ロシア艦船の拠点

まず第一に、日本の港ではロシア艦船への補給、特に食糧、飲料水、蒸気機関用の石炭などの備蓄補給が行われ、例えば一八六〇年九月には長崎で艦隊艦船四隻、コルベット艦「ヴォエヴォダ」、同「ポサドニク」、クリッパー艦「ヂギト」、同「ナエズドニク」が航海に必要な備蓄をそれぞれ補給した。例えば、コルベット艦「ヴォエヴォダ」は一ヶ月分の乾パン、水、石炭を受け取り、九月十六日にポシエト湾に向かった。<sup>16)</sup>

その際、コルベット艦「ポサドニク」の艦長 A・ピリレフは、艦隊司令官 I・リハチョフに宛てた一八六〇年十月二十九日付の報告書の中で、長崎での食料品の価格についての情報を伝えている(図版 4)。<sup>17)</sup> この情報を簡単に分析したところ、日本人業者の食料品価格はヨーロッパ人業者の価格に比してはるかに安かったことが判る。例えば、穀物一ブード【一六・三八 kg】は日本人業者の「ルーブル五〇コペイカに対しヨーロッパ人では二ルーブル三六コペイカ、また肉一ブードの価格は一ルーブル四〇コペイカに対し二ルーブル三八コペイカであった等。ロシア海軍軍人は国庫金節約の立場、さらに単に常識に従って、日本人業者からの食糧調達を選んだ。

日本の他の港でもロシア海軍軍人は自分たちの艦船備蓄の補給をすることができた。例えば、クリッパー船「ナエズドニク」艦長 F・ジェル

トウヒンは艦隊司令官宛に、箱館停泊中の一八六一年二月に「石炭と新鮮な食糧の補給を行った」、「乗組員は入浴し、また一部の者は散歩のため陸に上がることを許された」と報告している<sup>(18)</sup>。

日本の港でロシア海軍軍人は各自の艦船の応急修理や故障個所の修理も行った。例えば一八六〇年三月、クリッパー艦「ヂギト」の箱館停泊中に艦上で「釜の修理を含めた船舶修理作業」が行われた<sup>(19)</sup>。同年七月、コルベット艦「ボサドニク」では長崎滞在中に蒸気釜の入り組んで複雑な修理が行われた<sup>(20)</sup>。この作業はオランダ人ハルデス所有の工場において昼夜二交替で行われた。「ボサドニク」艦長A・ビリレフは艦隊司令官宛の報告書の中で、オランダ人自身は修理作業の際は現場主任、つまり「監督」の役割のみを果たし、基本的に作業は日本人労働者により行われたこと、また「日本人たちはほんのわずか学んだだけでも関わらず、作業に対して大変な能力を示した」とも記している。

一八六〇年八月、長崎の同じくハルデスの工場でクリッパー艦「ナエズドニク」の修理が行われ、三週間で「すべての煙突が修理され、煙管の修繕がなされた」<sup>(21)</sup>。

フォンド「中国海域艦隊」の文書の中に、一八六一年の一月から三月にかけて長崎においてクリッパー艦「ナエズドニク」で行われた複雑で厄介な修理の詳細な記述が残されている。その時艦は船体の気密性改善の作業を至急必要とする状態であった。作業のために船を湾内の浅瀬で特別な「台」の上に置くという決定がなされた<sup>(22)</sup>。作業の場所として「英国領事館埠頭の近くの」大きくはない入江が選ばれた。クリッパー艦の乗組員はやむなくすべての装備、兵器、食糧を陸揚げすることとなった。興味深いことに、「火薬および装薬された砲弾は日本の火薬庫に運び込まれた」。作業は干潮時に突貫作業で行われ、船体を覆う銅の被覆板が取り替えられ、すべての隙間にコーティングがなされた。全部で三五枚

の被覆板が取り替えられ、銅釘三〇フント【一フント＝四〇九・五g】が費やされた<sup>(23)</sup>。フリゲート艦「スヴェトラナ」の助けを借りてクリッパー艦「ナエズドニク」はようやく浅瀬から引き離され、江戸に向かい出航した。

長崎港では旗艦であるフリゲート艦「スヴェトラナ」の修理作業も一度ならず行われた。例えば、艦隊司令官宛の一八六一年四月九日付の報告書で艦長I・ブタコフはフリゲート艦の船尾部分の複雑でむずかしい修理について報告している<sup>(24)</sup>。この作業のために長さ二二フット【一フット＝三〇・四八cm】、高さ二〇フートの特別な箱が作られた。フリゲート艦の船尾の水中部分の点検のために長崎の住民を雇い入れることとなった。報告書には、点検は「日本の潜水夫により行われたが、彼らは冷たい水の中で三〇秒以上は留まることはできず」、そのため作業は大変難航したと記されている<sup>(25)</sup>。(図版5)

フォンドの中には、長崎におけるロシア艦隊の病院の創設と活動に関する一連の興味深い文書が残されている。現地の日本当局との合意に基づいて病院用として悟真寺の部屋がロシア海軍軍人に引き渡された。病院の設置、その設備、および艦隊司令部への物資補給に関する作業の指揮は、コルベット艦「ボサドニク」艦長A・ビリレフ侍従武官に委ねられた。彼は一八六〇年六月末I・リハチョフ宛に、「病院は華麗な建物内に置かれ、山に位置し、清浄な空気、周囲を取り囲む庭園の美しさ、各部屋が広いこと、どれをとっても素晴らしい」と報告している<sup>(26)</sup>。

これより少し遅れてA・ビリレフは艦隊司令官に宛てた別の報告で次のように記している。「私はそれが絶対に必要と信じて、我々の病院をヨーロッパ式にした。ちなみに、その費用は信じがたい程安い<sup>(27)</sup>」。ここでロシア士官が言っているのは、長崎の住民がこぞって病院に納入する食糧の安さのことである。艦隊のフォンドに保存されている帳簿に従え

ば、一八六〇年七月四日から十月二十四日までの期間の病院での病人の食事費用は三一九〇分、または一四四八ルーブル（病人に対して五五二二食が出された）、また、同じ期間の病院維持の国庫負担は総額で六四九六分、または二九四九ルーブルであった（図版6）。

クリッパー艦「ナエズドニク」艦長F・ジェルトゥヒンは一八六〇年八月十九日付のI・リハチヨフ宛の報告書の中で、病院に対して同じく高い評価を与え、今や重病人はすべてこの病院に送ることが可能となったこと、病院は素晴らしい部屋を使用しており、「全体としてこれ以上何も望むことはない」ことを記している。

病院内の仕事をしたのはロシアの船医たちであったということは、確認しておかなければならない。我文書館に保存されている文書には、長崎で当時常住していたヨーロッパ人の医者はオランダ人のポンペタだ一人であったという情報が記されている。彼は診療を精力的に行ったのみならず、日本の医者たちへの教育に従事し、日本政府の依頼により「ヨーロッパの大病院」の創設を指導した<sup>(30)</sup>。

すでに触れたように、長崎の病院はI・リハチヨフの艦隊全体のために作られたものであった。従って、ここではI・リハチヨフの艦隊の全ての艦船の海軍軍人に対して治療が行われた。例えば、一八六〇年十月十五日時点での患者リストでは八隻の艦船からの軍人が入院しており、その中には、フリゲート艦「スヴェトラナ」から九名、コルベット艦「ボサドニク」から一七名、コルベット艦「ヴォエヴォダ」から三名、その他が含まれていて（図版7）、この時点までに艦隊の軍人四六名が入院していた。

I・リハチヨフの艦隊が課せられた任務を遂行した後は、艦隊艦船の配置移動に伴い、長崎の病院はその活動を停止した。フリゲート艦「スヴェトラナ」艦長I・ブタコフは、一八六一年三月二十四日付の報告

書の中でこのことについてI・リハチヨフに次のように報告している。「長崎の病院を引き上げるに当たり、院内のシーツ類と食器類はフレガート艦に回収し、ベッドと椅子その他の家具類はすべてまとめて悟真寺に置き、寺の僧侶からその内訳書を預かった。僧侶には五〇ドルを支払った。彼は、すべての物品を然るべく保管し、寺の部屋を作り替えないことを約束した<sup>(32)</sup>。」

## 二、艦隊司令部と日本当局との関係発展

一八六〇年春、中国海域艦隊司令部は、艦船の長崎における長期滞在に向けて受け入れ可能な条件の整備に関する実務的な折衝を試みた。艦隊司令部は、長崎奉行岡部駿河守に病院設置およびその設備に必要な建物、艦員の一時滞在用の兵舎、および倉庫の借り上げを要請した。

この要請に対する回答書の中で、岡部駿河守は「私はロシア海軍軍人の要請を喜んで実行するものであり、彼らは寺院および民家を自由に借りることができる」と指示した<sup>(33)</sup>。更に、奉行の指示によりロシア海軍軍人の利便のために家が建てられ、奉行はこの件について艦隊司令部宛に次のように書き送っている。「ロシア人は私が彼らのために建てるよう命じた家に居住することができる<sup>(34)</sup>」。すでに上で述べたように、病院のために悟真寺が供与され、その他に、二つの家が兵舎と倉庫用に割り当てられた。ちなみに、これらの建物の賃貸料はきわめて穏当なもので、悟真寺については住職に月六〇分（二〇ドル）を、兵舎用の建物については月四〇分（一三ドル）を庄屋の志賀に、それぞれ支払った<sup>(35)</sup>。

一八六〇年六月三十日、コルベット艦「ボサドニク」艦長A・ピリレフは数名の士官を伴い長崎奉行を訪問したが、艦隊司令官宛の報告書の中で彼が記しているところによれば、「受けた応接は儀式張ったもので

はあったが、きわめて慇懃で、完全にヨーロッパ式であった<sup>(36)</sup>。

その後しばらくして一八六〇年八月にA・ビリレフは奉行から閩兵式に招待された。これについて上司に宛てた報告の中で彼は次のように伝えている。「私は」この名状しがたい独特な閩兵式に列席した最初のヨーロッパ人であった。唯一滑稽であったのは礼と行進のみで、照準射撃はヨーロッパ人にまず劣らないと言つてよい<sup>(37)</sup>。

ここで特筆しなければならぬのは、奉行岡部駿河守との友好的関係は、長崎に寄港したすべての戦艦の艦長との間に形成されていたことである。例えば、一八六一年一月クリッパー艦「オプリチニク」が神奈川に向けて長崎を出航する際、艦長に対して奉行から「日本の港であればどこでも艦の物資を補給する権利を与える」特別な証書が下付された<sup>(38)</sup>（図版10）。この種の書状は、官用で派遣される日本役人に対してのみ下付されるものであった。

ロシア海軍軍人と日本当局の代表者との間に形成されたきわめて友好的な関係は、一八六一年二月、長崎の庄屋【の息子】志賀浦太郎がロシア語学習のため箱館のロシア領事館に派遣されていることから証拠づけられる<sup>(39)</sup>。

一八六一年春、艦隊の一部は配置移動に伴い日本の港を後にした。岡部駿河守はI・リハチヨフに宛てた書簡の中で、長崎において供与された全ての建造物に対する権利をロシア海軍軍人は保有するということ、「この建造物が将来ロシア艦船に必要なとなった時には、いつでも彼らに引き渡されるであろう」ことを保証した<sup>(40)</sup>（図版12）。

フリゲート艦「スヴェトラナ」I・ブタコフ艦長は長崎を出航する前の一八六一年三月末、奉行を別れの挨拶に訪問した。その後奉行がフリゲート艦を答礼訪問した。奉行に敬意を表して午餐が出され、その後で蒸気艇で入江の遊覧が行われた。奉行は「満足の意を表し、長崎の停

泊地にロシア人がいなくなることを残念に思うと述べた<sup>(41)</sup>。

一八六一年六月初め、箱館で大火が発生した。その消火活動に当地に停泊していたクリッパー艦の軍人が積極的に参加した。消火のために「斧、バール、桶、甲板用小型ポンプを手にした半数の乗組員」が大至急陸上に派遣された。岸から火災現場までの距離を軍人たちは「道具類を手にとり走破し、無事間に合い、緊急消火活動に多大の貢献をした」<sup>(42)</sup>（図版13）。数日後箱館奉行【村垣】淡路守がクリッパー艦「オプリチニク」を個人的に訪問し、I・セリヴァノフ艦長に深い謝意を表した。

### 三、住民との交流

ロシア艦船の日本沿岸滞在中に海軍軍人と地域住民との接触が比較的頻繁に行われた。多くの場合それは友好的性格のものであった。

一八六〇年五月、大暴風の際、沈みかけた小舟に乗っていた日本漁民をコルベット艦「ボサドニク」の軍人たちが死の淵から救った。漁民の救助のためにP・セルコフ大尉の指揮するボートが降ろされ、ロシアの海軍軍人たちは自身の命の危険を冒しながら漁民を救った。この件で長崎奉行岡部駿河守はコルベット艦の艦長に感謝状を送った<sup>(43)</sup>（図版14）。

これに関連して我々から見てきわめて興味深いのが、一八六〇年六月末I・リハチヨフに宛てたコルベット艦「ボサドニク」艦長A・ビリレフの報告である。この文書の中でロシア海軍軍人と地域住民との交流について幾つかのことが具体的に述べられている。中に次の一節がある。「長崎の悟真寺の」日本の僧侶たちおよびその付近の住民たちはロシア人に極めて好意的で、大部分はロシア語を話し、しかもそのうちの多くは流暢でさえある<sup>(44)</sup>。

このような状況が成立していたことについては、中国海域艦隊が編成される以前に、あるいはまたコルベット艦「ボサドニク」の長崎寄港以

前に、長崎へはロシア艦船が一度ならず寄港していることにより説明することができる。例えば、スクリュー式コルベット艦「アスコリド」が数か月停泊したことがあり、艦員たちは悟真寺を自分たちの施設として使用していた。

そして「ボサドニク」が長崎に滞在していた時には、地域住民の要請と奉行との合意に従い寺院内の建物のひとつにロシア軍人により学校が設けられ、地域住民たちが「ロシア語の読み書き話すを学んだ」。この学校で教授の任に当たったのは艦付の司祭で、助手に艦付の書記二名があてがわれた。このめずらしい風景をA・ピリレフは次のように描いている。「日本人たちが貪るようにロシア語を学んでいる姿は一見に価する。刀を差した三〇歳代の者たち、八、九歳の少年たち、全員が同じ長椅子に腰掛けて日本人ならではの熱心さで勉強している。」

残念なことに、きわめて稀ではあるが、時折、双方の交流の中で不快な事件も起きている。この種の出来事についての情報が艦隊フォンドの文書の中に残されている。一八六一年九月二十三日クリッパー艦「オブリチニク」の医師が襲撃をされた。医師は夕刻騎馬で臨時兵舎から艦に帰る途中であったが、道で立ちほだかった見知らぬ日本人が医師に向かって何か叫びながら、彼の顔を刀で一撃した。<sup>(46)</sup>

この事件は直ちに奉行【村垣】淡路守に伝えられた。取り調べが行われた結果次のことが明らかになった。すなわち、メルガワ・デキダ【増川伝吉】という名前の日本のある役人（「クマ・ドオ・シクト」【組同心】）が、酩酊状態のためG・ガモリツキーが外国人とは分ならず、馬から下りて挨拶をするよう要求し、言い争いの最中に医師に刀で一撃を加えたのであった。

箱館奉行は艦隊司令部に犯人は処罰されるであろうことを確約したが、その際「この犯人は穏和な性格で知られている」と付け加えることも忘

れなかった。<sup>(47)</sup>

#### 四、日本沿岸付近の水路測量調査

すでに上で触れたように、中国海域艦隊編成に当たってI・リハチヨフに与えられた訓令で「近隣諸国」を「政治および海事面において」調査する目的で訪問することが規定されていた。

日本の本格的調査を積極的に推進したのはE・プチャーチン海軍大将であった。一八六〇年秋、彼はロシア政府の任務を実行するに当たり新しい軍艦の建造を英国で注文した。中でも新しいクリッパー艦「ガイダマク」の建造に際しては、浅い海域での航行および水路測量調査のために「出来るだけ吃水を浅くするように」という依頼がE・プチャーチン自身により英国の戦艦建造業者に対して出された。<sup>(48)</sup>海軍省長官N・クラッベに宛てた一八六〇年十月十日付の書簡の中でE・プチャーチンは、クリッパー艦「ガイダマク」を「主として日本の余り知られていない沿岸の測量調査のために」活用しよう提言している。更にE・プチャーチンは、「ガイダマク」の航海時に若い日本人数名を海事学習のために艦上に乗せることが、「日本人と我々とのより友好的かつ信頼的關係確立に向けて」目的に適ったことと考えていた。<sup>(49)</sup>残念なことに、我々にはその原因は不明であるが、栄光ある航海者のこの興味深い計画はロシア艦隊が中国海域で行動していた時期には実行に移されなかった。

いずれにせよ、この時期ロシア海軍軍人による日本沿岸調査は確実な成果を挙げている。例えば、一八五九年、蒸気式コルベット艦「アメリカ」が江戸に向けて航行中に津軽海峡において水路測量調査を行った。この調査に参加した一人のP・ナジモフは一八六一年『海軍論集』にその回想記を掲載した。<sup>(50)</sup>中でも、海峡の測量調査の部分で次のように記している。「…海峡の両岸には良好な投錨地が多い…海峡内で幅において

大きな拡がりをおくている主な海流は西からのものである。」など。<sup>(51)</sup>

回想記の作者に特に強い印象を与えたのは、途中で遭遇した「それぞれ十四人から十六人乗り組んだ七五隻（すなわち約一二五人）の日本の漁船団で、彼らは嵐およびあらゆる海上での突発事に慣れた勇敢な船乗りたちであった」。これらの観察を基にP・ナジモフは次のような結論を下している。「これらの人間を良き海軍軍人に養成するのはそれほど難しいことではない。これに国民的愛国心を付け加えれば、日本は何万人もの海軍軍人を、すなわち将来の発展に向けて日本にもたらされる可能性と手段を擁することになる」。それから半世紀も経たないうちにロシア士官のこの予言的見解を説得力を以て歴史が証明した。

我々は「中国海域艦隊」フォンドの中に、ロシア軍艦により行われた別の学術研究に関する一連の文書をも見つけ出すことができた。例えば、一八六一年三月長崎から江戸に向かう航海の際クリッパー艦「オブリチニク」により行われた調査もそのひとつである。中でも、一八二七年に英国水路局により発行された地図に記載されたデータの綿密な検証が行われた。<sup>(52)</sup>クリッパー艦の士官たちは定期的な水深測定に探深鉛を用い、海流の強さの測量、ヘグリ【舳倉】、ニッポン【本州】、アワジ【淡路】、オオシマ【大島】などの島、トモ【駒ノ浦】、スス、ヒョーゴ【兵庫】などの湾の沿岸線測量調査に従事した。<sup>(54)</sup>

一例として兵庫湾の測量調査からの抜粋を引用する。「岸全体に沿って点在する村の多さから見ても、このあたりの住民数は間違いなく相当に上るものと判断できる。岬の右手に中国の仏塔に似た塔が建てられていて、良い目印になる。岬の豊かな森も同様に良い目印になる、なぜならば、その森を目指して直進すれば川への入口を示す杭が視界に入ってくるからである。」<sup>(55)</sup>

一八六一年四月、横浜から箱館に向かう航海の際クリッパー艦「オプ

リチニク」により同じく、風向の確定、海流の強さ、気圧計の示度などの水路学調査が行われた。<sup>(56)</sup>

ロシア海軍軍人により行われたこれらの学術調査が隣国についてのロシア人の認識を広げたことは言うまでもない。

最後に結論として、我々が行ったロシア国立海軍文書館所蔵のフォンド「中国海域ロシア艦隊」の文書の研究と体系化は、これら文書に露日交流史に関する極めて興味深いかつ価値のある情報が含まれていることを明確に示した。

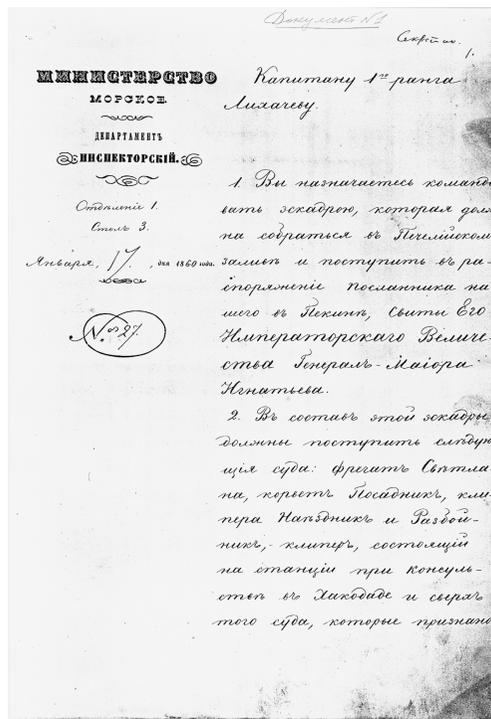
従って、これらの歴史資料の公刊を将来実現することは、目的に合うものであると同時に焦眉の課題である。

(翻訳：有泉和子)

#### 註

- (1) Российский государственный архив Военно-Морского Флота (далее - РГАВМФ), Ф.240. Оп.1. Д.1. Л.17.
- (2) РГАВМФ. Там же. Л.17 об.
- (3) Там же. Д.1.22-22 об.
- (4) Там же. Л.26.
- (5) Там же. Л.22 об.
- (6) Там же. Д.1.23-23 об.
- (7) Там же. Д.1.24-25 об.
- (8) Там же. Л.1.
- (9) Там же. Л.3.
- (10) Там же. Л.4.
- (11) Там же. Л.40.
- (12) Там же. Д.4. Л.116.
- (13) Там же. Л.117.
- (14) Там же. Д.1.27-28.

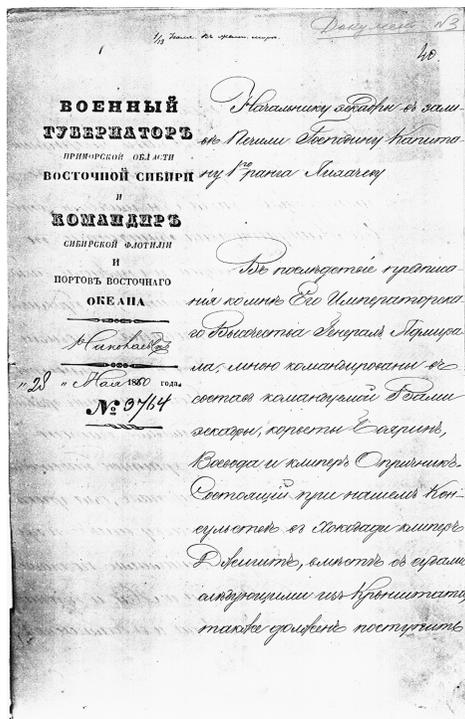
- (15) Там же. Л.127.
- (16) Там же. ЛЛ.111 06.-112.
- (17) Там же. Д.14. Л.4.
- (18) Там же. Д.21. ЛЛ.4-5.
- (19) Там же. Д.4. ЛЛ.10-10 06.
- (20) Там же. ЛЛ.64-65.
- (21) Там же. Д.5. ЛЛ.19-20.
- (22) Там же. Д.18. ЛЛ.45-46.
- (23) Там же. Л.46.
- (24) Там же. Д.25. ЛЛ.17-18.
- (25) Там же. ЛЛ.19 06.-20.
- (26) Там же. Д.4. Л.65.
- (27) Там же. Д.15. Л.5 06.
- (28) Там же. Д.14. Л.2.
- (29) Там же. Д.5. Л.20 06.
- (30) Там же. Д.15. ЛЛ.6 06.-7.
- (31) Там же. Д.15. ЛЛ.25-26.
- (32) Там же. Д.21. ЛЛ.5-5 06.
- (33) Там же. Д.3. ЛЛ.46-47.
- (34) Там же. ЛЛ.49-50.
- (35) Там же. Д.14. Л.35.
- (36) Там же. Д.4. Л.64-64 06.
- (37) Там же. Д.15. ЛЛ.7-7 06.
- (38) Там же. Д.30. Л.1.
- (39) Там же. Л.11.
- (40) Там же. Л.29.
- (41) Там же. Д.21. ЛЛ.8 06.-9.
- (42) Там же. Д.25. ЛЛ.43-43 06.
- (43) Там же. Д.3. ЛЛ.43-44.
- (44) Там же. Д.4. ЛЛ.64-64 06.
- (45) Там же. Л.65.
- (46) Там же. Д.45. ЛЛ.1-2.
- (47) Там же. ЛЛ.11-12.
- (48) Там же. Д.4. ЛЛ.120-121.
- (49) Там же. Л.122.
- (50) Назимов П. «Из воспоминаний о Японии». Морской сборник. Том LV. № 10. 1861, октябрь. СС.328-334.
- (51) Там же. СС.330-331.
- (52) Там же. С.329.
- (53) РГАВМФ. Ф.240. Оп.1. Д.18. Л.48.
- (54) Там же. ЛЛ.49-51..
- (55) Там же. Л.52 06.
- (56) Там же. ЛЛ.59-60.



図版1 1860年1月17日付 リハチョフ大佐宛海軍元帥コンスタンチン・ニコラエヴィチ大公および海軍省長官 N.クラッベ大将訓令



図版2 60門装備のスクルー式フレガート艦「スヴェトラナ」



図版3 1860年5月28日付 中国海域艦隊司令長官リハチョフ大佐宛沿海州軍務知事 P.カザケヴィチ海軍少将書簡

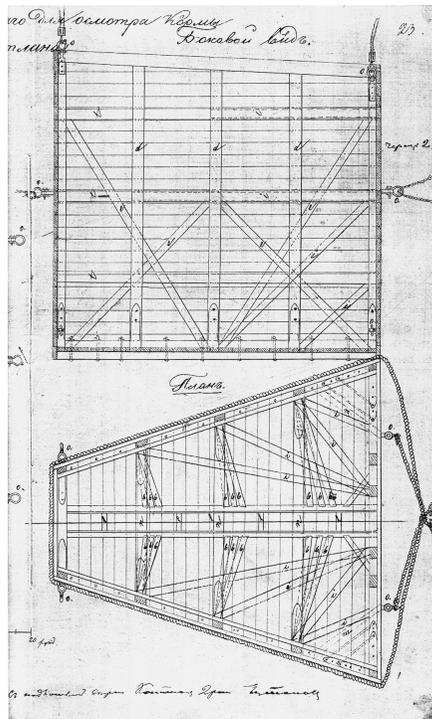
Справочная цѣны въ Нагасаки.

	Въ фунтѣхъ	Копѣекъ
<b>У Сербинцевъ.</b>		
Свиное сало . . . . .	2	38
Ветчина . . . . .	2	50
Волна на 100 порцій . . . . .	2	9
Сало . . . . .	2	36
Пшеница или гречиха . . . . .	9	97
<b>У Анцевъ.</b>		
Пшеница 24 бу за одного дѣла или обогрѣта гречиха	1	40
Ветчина . . . . .	1	50
Волна . . . . .	1	50
Копченый сало (вино) . . . . .	1	40
Волна на 100 порцій . . . . .	1	22
Рисъ 1 пудъ . . . . .	1	5
Саладиный песокъ 1 пудъ . . . . .	4	20
Чай 1 фунтъ . . . . .	45	2
Торъ 1 пудъ . . . . .	80	

Срѣдняя цѣна за фунтъ . . . . . 12

図版4 長崎における食料品価格一覧 1860年10月29日付 中国海域艦隊司令長官リハチョフ大佐宛ボサドニク号艦長ビリレフ報告書より

(197) 露日関係史料としての I・F・リハチョフの中国海域艦隊の文書 (ソボレフ)



図版5 1861年4月9日付スヴェトラナ号艦長ブタコフ報告書より 船修理に関する図面

Документ № 6. № 44.  
2

Вводная

Список вещей доставляемых в Армию в течение года в Наказном Кошелеке от 4-го Июня по 24-му Октябрю 1860 года и оных расходов.

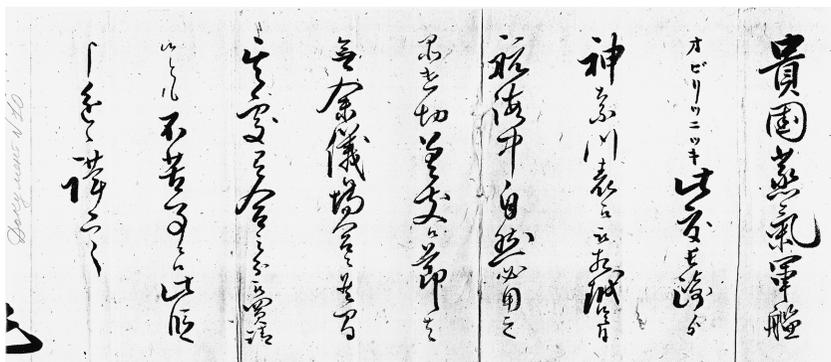
Итого по плану		Сумма	Вещей	Всего
Итого по плану		342	1695	1374 582.2
<b>Оборудование и ремонтные работы</b>				
<b>Содержание</b>				
Аренда по 24-му Октябрю	390	-	1440	474
Содержание и ремонтные работы	833	-	399	754
Итого	53	-	23	90.2
Содержание и ремонтные работы по 24-му Октябрю	177	-	20	9.2
Материалы и ремонтные работы	1157	-	523	544
Итого по плану	427	-	193	213
Итого по плану по правому и левому борту	619	-	260	213
Итого по плану по 24-му Октябрю		2919	22	

図版6 1860年7月4日から10月24日までの期間の病院維持費用 中国海域艦隊司令官リハチヨフ大佐宛ボサドニク号艦長ビリレフ報告書より

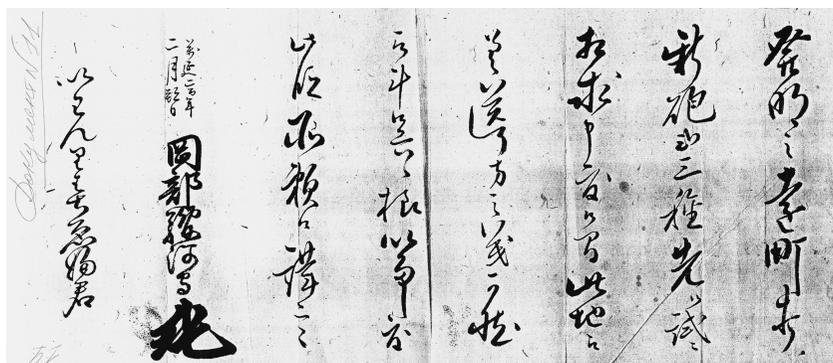




図版9 万延元年8月17日付ボサドニク号艦長ビリレフ宛長崎奉行岡部駿河守書簡



図版10 万延2年1月27日付中国海域艦隊司令長官リハチョフ大佐宛長崎奉行岡部駿河守書簡



図版11 万延2年2月1日付中国海域艦隊司令長官リハチョフ大佐宛長崎奉行岡部駿河守書簡



図版12 万延2年1月27日付中国海域艦隊司令長官リハチョフ大佐宛長崎奉行岡部駿河守書簡

